

昭和三十五年六月 〔講演要旨〕

「近代文学における恋愛について」

早稲田大学名誉教授 文学博士 本間久雄先生

本間博士は現在、明治文学の研究に全力を注ぎ、その完成をめざして、昭和十年以来今日まで二十有余年間、鋭意研鑽しつづけておられる。

「人生はまさにストイック的情熱の連続でなければならぬ」という博士の学者的な態度を深く塾生に与え、誠に心の中に込みこむような心あたたまる講演であつた。

特にイプセンの『人形の家』と『海の夫人』の作品を中心として博士の該博なる知識と、いかにも文学者らしい見事な理論的解説を通して、問題を提示しつづつ展開し、結論へと導き理解させてくださった。

まず文学者とは、いったい作品に対してどのようなありかたでなければならぬのか、それは常に時代に起っているいろいろの問題、例えば婦人問題とか新旧思想の問題、あるいは宗教・道徳の問題、階級問題とか人種問題、その他人生観、世界観といった問題を取りあげて考へると同時に、いわゆる先覚者的な「先見の明」をもつて、その時代よりも先駆しつづつ、これから起ころうであろう以上のような問題を世間の

人びとに提起していく者でなければならぬ。

そのためには文学者自身、高い理想を持ちつづつ、しかもなお現実を目を蔽い、また、あきらめることなく、この世の中にある多くのけしからぬことに対して憤りを感じなければならぬし、またこれを見抜く眼を持たねばならないと説き、明され、こうした見地からしてイプセンは、まさに立派な文学者であつたといわねばならない。彼が作品に取りあげた問題は、今日ではあまり問題にならず、またすでに解決された問題となつてはいるが、当時にあつては「結婚」とか「恋愛」の問題などは非常に重大な問題であつたので、誰もが経験しまた悩みつづつあつたのであるが、どうにもならない問題としてあきらめに近い考えを持つていたとき、「結婚」と「恋愛」という人生における重大問題に関して起るいろいろの問題を世間の人々の前に取りあげ、深くこの問題を考えさせ、作品を通して読者なり観劇者に対して、その問題の解決を迫まつたというところに、新しい文学者のありかたを示した点に重要な意義があつた。

トルストイなどもたしかに重大な問題を作品にかかげているが、その問題に対する解決を彼自身が読者に示し、かくの如く考え、またこのように考えるべきであると、その問題の鍵を自ら示している点、文学者というよりもむしろテイチャーであるとし、イプセンは彼自身ちゃんとその作品に対する解決を持つていながら、それを示さず、読者自身の問題として考えさせてしまふところに勝れた文学者としての彼の価値があつたと、彼の『人形の家』に対する作品の特徴を説明された。そして『人形の家』の解説を、あたかも目の前に見るが如く、すばらしい話法力で一氣にラスト・シーンまで引っぱり、結局この作品に表わさんとした問題は「奇蹟」「奇蹟」といつて頭をかかえ考え込む夫の心と、そしてまた「奇蹟が起つた時に帰つて来るでしよう」という妻の心の内にある「奇蹟」こそが唯一の解決の鍵となるので、この鍵こそ、に我々自身夫であり妻であるところの者が互に理解しあつて考え、求め、作り出さねばならぬものであるとイプセンは叫んでいるので、

それこそまさに「夫婦の愛情は人形を愛するよ
うな愛ではなく、お互いに人間として独立した
ものとして妻を愛さねばならないし、妻はただ
夫の名誉のために無条件に犠牲になつてはな
らない」。こうした答がわかつた時が「奇蹟」
だというのであり『人形の家』が「ノラの独立
宣言」といわれる所以だと説明された。

さらに『海の夫人』を通して「恋愛」の問題
を取りあげ、Love is freedom と Free love の
大切な相違点を説明せられ、自由のあるところ
には必ず責任があり、責任のともなわない自由
こそは誠に悲劇である、恋愛はまことに祝福さ
れるべきではあるが、決してそれはなまやさし
いことではなく、そこにはお互いが責任を持ち
つつ努力しあうところに「恋愛」がなりたつ
であると『海の夫人』を通じてこの意義を説明
され、こうした真実一路のストイックな生活を
お互いに形成するところに恋愛が祝福される
ものとなり、幸福な結婚に至るので、かくて生
まれ出ずる子供は勝れた子供でなければなら
ないと優生学的問題まで関係があるのではな
かるうかと、つきさる思いの内に一時間有余の
講演が静かに幕を閉じたのであります。

(西寮々長・植田記)

用いられている場合がございりますが、講演時の時代背景等を尊重し、
当時のままといたしました。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が